

## 「かけの特徴について」

かけは三ツがけと四ツがけでは当然違いますが、同じ三ツがけでも帽子の角度が作者により異なることがわかりました。射を修得して行く過程でかけは大きな影響を与えます。かけの特徴を知ることは大きな意義があると思います。私も射について当然ながら勉強中であり、その過程でかけをあんに変えることについて批判もあると思いますが、微力ながら特徴について考察しましたので述べてみたいと思います。

古来より射には騎射、歩射、堂射とあり、騎射は馬上から射るため正面打ち起しで諸がけ柔らか帽子でありました。歩射は身を守るため斜面打ち起しで、刀も使えるよう柔らか帽子で作業性もある三ツがけであったようです。

江戸時代になり弓は戦闘用から弓術へまた、三十三間堂の通し矢の堂射が盛んに行われるようになりました。堂射は低い弾道で遠くに飛ばすため弓も強さを求められました。このため四ツがけが考案され、帽子も硬くして強さに耐えることができました。また、各流派がそれぞれの目的をもってかけの改良をおこなってきた結果、現在の硬帽子が一般的になっています。

前置きが長くなりましたが三ツがけから述べてみたいと思います。

大きな特徴として、帽子は中指が掛ければよいので四ツがけに比べ短くできています。しかし、作者により帽子の向きが若干違います。人差し指側（上側）に向いているか、薬指側（下側）に向いているかです。人差し指側に向いているかけは、離れで帽子が起きやすいという目的で考案されたようです。このかけの場合、取り掛けでは人差し指を中指の上に乗せると掛かりにくいので、帽子側に並べて取り掛けると楽に掛かります。そして、弦枕は帽子と弦とを直角にあてるため一文字に切れています。取り掛けで既に直角のため正面打ち越しの場合、会でことさらかけを内側に捻る必用はありません。肘の回転に任せてしまえばよいでしょう。

一方、帽子が薬指側に向いているかけは、中指に人差し指を重ねるように取り掛けます。切り口は四ツがけの大蛤に似て下が少し流れています。そして、弦枕が下へ向いている分だけ、会で弦と直角にあてるためには捻りが必用です。捻りといっても手首に張りがあれば上腕から肘の回転が親指に伝わってくるという感じです。結果として会では双方同じ形になります。人差し指も親指に掛け中指と力を二分させ、離れを軽くする目的の方法もありますが、正面打ち起しでは一般的ではありません。

三ツがけは中指を掛けるため扱いやすい利点があります。反面、手首が自由になります。このため招き猫で引掛ける引き方やコウ側（上側）に反る、手先に力が入るなど癖がつきやすくなるため初心の時に注意しなければなりません。また、手首の力を抜き過ぎると張りがなくなり平付けになってしまいます。取り掛けた形を会まで変化させない、下筋を使って上腕に前腕を乗せるような運行が必要です。

詰め合いで肩甲骨下を中に押し込み、上腕の下付け根を意識し、肘を後ろ側に閉めながら体で伸びて行くと引掛けた中指が外れ、親指は変化しないで弦は軽く抜けてくれます。親指が短いので切れさえよければ帽子の腹を弦があたらない利点がここに 있습니다。しかし、親指を握り込んだり、手先で切ったりした場合、弦が帽子にあたり前矢がでます。帽子を見れ

ば傷跡がついているためすぐにわかります。

離れは伸び合いのなかで開きながら弦枕と直角に離れるようになることが大切です。

次に四ツがけについて述べます。

四ツがけは三ツがけと比べ、下弦の力を薬指、中指、人差し指で支えるため強い弓が引けます。しかし、弱い弓でも離れの軽さには関係ありません。

当然、薬指が掛かるため帽子は長く下へ向いています。新しいうちに薬指が掛からないとあって余り親指を曲げると三ツがけと違い帽子の背が折れてしまいます。新しいうちはゆるく紐をかけましょう。

取り掛けでは矢に対して平行に親指を差し込みます。薬指の上に中指、人差し指を添えます。そして軽く弦を親指で押して張りを作り、力の上で十文字が出来上がります。取り掛けた形は会まで堅持されます。故意に手首を動かさない限り、三ツがけと違い何もできないというのが実態です。弦枕と矢枕の間が三ツがけと比べ幅が広がるためです。

手首の力を抜いても相応の捻り（張り）は保てますから捻る力は特に不要です。逆に手首で捻る力を加えると前矢が出ます。特に控えが硬い の場合は親指が自由になりませんから顕著に前矢になると思います。

四ツがけは三ツがけと比べた場合、引き分け・会での詰め伸び合いは基本的に同じですが、捻ることができない分、前腕の張りが体全体の張りを作りやすく、両肘で開く引き分けができると思います。離れでは一杯に引き分けた伸びの中で、手首の力が抜けていれば薬指が外れると帽子は上に弾かれ軽く抜けて手首が返ります。離れで帽子が上にきます。三ツがけは捻られた形がそのまま残るため帽子はむしろ人差し指より下になります。

無双かけは親指の付け根が柔らかいため、三ツがけに近い形でも抜けてくれるようです。

私は四ツがけから始めましたが、三ツがけを使ってみて最初は簡単と思っていました。ところが、手首は自由になるため、形を考えはじめると何が正しいのか判らなくなることもありました。しかし、三ツがけが基本と思い悪戦苦闘の末、ある程度形が決まってきたのも最近のことです。途中、もう四ツがけは使うまいと思ひ後輩に預けたこともありました。

最近また四ツがけを使っておりますが三ツがけにない張りを感じ、離れでその特徴をいかに発揮できるか勉強中です。

飛貫中を目的とし、体力に合った弓の強さで軽く鋭い離れを求めたとき、三ツがけ、四ツがけを問わず妻手の力を任せられるかがポイントです。安心して伸び合うことができ、軽く鋭い離れができれば最高のかけです。

指の大きさは自分の手にフィットしているのは当然ながら、自分にあったかけにめぐり逢うことは大変幸せなことです。そしてかけの特徴を知り、そのかけを信頼し育てていくことが弓道をおこなう上で一つの喜びとやりがいかもしれません。

文章では表現しきれないところもありますが参考になればと思います。

平成14年1月 日

岩 田